

心理学部 学外編 での3

～T 教授の観察ノートから～

2008.4.15

タツノオトシゴ



T 教授の研究室から巣立って行った学生たち・・・
まるで映画の登場人物のような、個性ある集団です。

毎回登場する C.G.ユング君、今回は何を見つけたのでしょうか(^^;
S 婦人との T 教授の関係も謎めいており、スリルとサスペンスの世界???

ほら、噂をすれば向こうからやってくるのは C.G.ユング君ではありませんか！
毎日、湖畔の路を走ってやってくる少年、金髪の細い筋が日に反射し光っています。
ユング：「うさお お兄さん、お早うございま～す」

彼は小脇に細長い黒い箱を抱え、小走りに近寄ってきました。

うさお：「お、おはよう・・・ボソボソ」（苦手なんだよなあ、この手の明るく健康的な声は）
「ところで何だい、その黒い箱は？」とチラッと横目で見て興味を示します。

ユング：「お母さんが『この箱を S 婦人の所へ持っていきなさい』と言ったので、今から届ける場所なんです。」

うさお：「ふ～ん、食べ物ではなさそうだね・・・」（中身を知りたいが、直接は聞きにくいし）

ユング：「お母さんは『夜の儀式に使う事があるかもしれないからね？』と言っていたけれど・・・僕も知らないんだ！」チョッと警戒気味に、箱を横に抱える

うさお：「S 婦人は先ほど忙しそうにしていたから、
何処かへ出かけるつもりなのかも？」

「執事に預けておけば良いんじゃないかな？」親切そうにアドバイスする

ユング：「そうか、困ったな～あ、直接渡すように
と言われているんだけど・・・」

うさおは自分のペースに引き込めたので、
満足げに頷いています。

うさお：「それなら、僕の部屋に戻って S 婦人の手
が空くのを待ってみるかい？」

「そのうち、健さんも散歩から戻って来るし、
今のところ予定も無いから・・・」

本音は、箱の中身を知りたくて、何時もより
饒舌になっています。



ユング：「そうですね、箱の番もしながら待たせてもらえるなら助かります」

少年はチョッと警戒しながらも、健さんが戻ってくる事で安心しています。

このように相手の不安材料を先読みし、解決方法を提示する誘導的な手法は古典的です。うさおも、研究室の一員として、この程度の技術は持っているようです。

うさおとユング君が歩き始めると、脇道から健さんが出てきました。

健さん：「おや、珍しい組み合わせじゃないかい！うさおとユング君とは……」

健さんを見つけて、ユング君は顔を輝かせています。

ユング：「健さん、お早うございます。これからうさおさんの部屋に行くんですが、健さんも一緒にお話しませんか？学校での面白い話を聞かせてください」

健さん：「それは構わないけれど、うさおは何か用事があったのでは？」

うさお：「いやいや、あれは後でも構わないし、今日は退屈していたんだし……」

相変わらず、何か意味不明な申し開きをしています(^^;

ユング：「ご迷惑なら、僕出直してきます」少年は不安そうな眼差しでうさおを見ています。

うさお：「僕も健さんに相談したい事があったし、丁度良い所で会えたし……」

「それじゃ～あ、さっそく部屋に戻るとするか」（ふ～う！）

健さんとうさおはユング君を引き連れ、館へと戻っていきます。

夕方の薄暗くなるまで、部屋で3人が時間を過ごし、ユング君はS婦人の所へ例の黒い箱を無事に届けることが出来たようです。(^^;

T教授も夕方には姿を現し、その後、部屋で論文や日記を書いたりしています。

今夜はS婦人により、例の降霊会が開かれた。『搦れた2本の赤いロウソクは独特の香りを放ち、真ん中に置かれた香炉からも紫の煙が立ち昇っている。S婦人の勧めで街まで買い物に行ってきたが、多分あれにはこの煙の影響を少なくする効果があるのだろう。今夜の会のあと、学生たちがどんな夢を見るのか興味が湧く(^^;)』

時は20世紀に移り、ウィーンのある病院内に、斬新な礼拝堂が建設されました。設計はかの有名なオットー・ワグナーでアム・シュタインホフ教会と呼ばれています。



(別名：狂った人のための教会)

後世の記録によると、T教授の知り合い何人かが此処を訪れています。

『うさお は昔から神経質な面があったが、今回はもう少し注意しておけば良かった。他のメンバーより影響を受けやすい体質なのかも知れない。絵を描かせても独特な雰囲気を持っているし、未来志向が強くマニアックな点は健さんとも似ているようだ。』

うさをが見た夢は過去ではなく、自分も知らない未来の世界です。(^^ ;

世の中、将来を予測するのは「占い師」の領分です。小説家にも SF 作家がいますが、うさおの場合は後者に属する範疇でしょう。自分で日常的に未来のことを想像していると、夢にまでその出来事が伝わってきます。夢と現実を区別できる場合は良いのですが、その境目が見えにくくなると自分でも混乱します。19 世紀の時代、世紀末の不安から色々な出来事が起こっています。心理学の発展に寄与した多くの学者は、そんな時代の中から『人間の心理』を抽出し分類しています。

ユングが生まれる 5 年前 (1870 年) に A. アドラーが生まれ、12 年後にヒトラーが生まれます。

T 教授は、「うさお」と「健さん」の中に後年のアドラー理論と共通点を見つけ出したようです。



<以下アドラー心理学の基本から引用>

アドラー心理学はアルフレッド・アドラー(1870~1937 オーストリア)が創設した臨床心理学です。20 世紀初めにアドラーは一時フロイトと共同で研究しましたが、理論上の対立(エディプス・コンプレックスをめぐる)から離脱、独自の心理学を樹立し「**個人心理学**」と名づけました。(人間全体をパーツに分割せず、まとまりのある生命体「個人」としてとらえることです。)

精神の内部よりも**対人関係のあり方に焦点を当てた実践的な心理学**で、その人個人の内部には対立・葛藤はなく、一見違った動きをしているように見えても、実は全体として協力し合って目標を達成しているとする考え方は、アドラー心理学の基本前提のひとつ「**全体論**」として、この心理学を特徴づけています。

第 1 次大戦後、敗戦で荒廃したウィーンに**世界最初の児童相談所**をつくり、子どもとその親・教師などの援助を積極的に行ないます。その後、ナチスの迫害で晩年はアメリカへ亡命し弟子の多くが強制収容所で死に大打撃を受けますが、アドラーはアメリカとヨーロッパを駆けめぐり精力的に講演活動を続け、1937 年講演旅行中のスコットランドで急死しました。

アドラーの考え方では「**個人の主体性**」が一番大事です。

個人(私、人間、)が精神機能を使って自分および他者を動かすという考え方に立っており、**他の心理学や世間の一般通念はこの逆で、精神機能が個人を動かすと考えるから**です。

たとえば、「子ども時代の育児が大人になってからの行動を決定する」とか「過去に受けた心の傷が今の私の行動を決定する」(原因論)、「自分で自分の感情をどうしようもない」(要素論)と主張することは、個人の主体性を否定しアドラー心理学を拒否したことになります。

フロイトやユングの立場、一般的な社会通念では、「心が個人(私)を動かす」「感情が……」「本能的……」「習慣が……」「性格が……」「幼児期の心の傷が……」「コンプレックスが……」「自我が……」と考えますが、アドラー心理学では、「個人が心を使って」「個人が感情を使って」……というふうに、個人の意思が**目標を達成する**と考えるのです。一概にどちらが正しいかは言えません、アドラー心理学は後者を選択します。

目的論と原因論の対立

「人間の行動にはすべて理由がある」というのが20世紀の心理学に共通する考え方です。すなわち、一見どんなに不合理に見える行動(や感情や精神活動一切)も、よく探してみると**必ず筋の通った理由が見つけれ**ると現代の心理学は考えています。つまり、「人間の行動には**すべて原因がある**」と考えるのが普通の心理学なのです。精神分析の創始者フロイトをはじめ、ほとんどの心理学者はこのように考えています。この、『理由』すなわち『原因』と考える考え方を『原因論』と言います。

アドラー心理学も「人間の行動にはすべて理由がある」と考える点では他の心理学理論と共通しています。ただ違うのは、『理由』という言葉で、『原因』ではなく、『目的』と考えるところです。「人間の行動には**すべて目的がある**。」これがアドラー心理学の第一の基本前提であり、『目的論』と呼ばれます。

人間は目的に向かって生きていきます。『目的』というのは、ごく近い目的もありますし、人生の究極の大目標もあります。アドラー心理学では、近い目的を『目的』、人生の究極目的を『目標』と呼び、区別しています。

一々の行動の目的は、すべて結局は、人生の究極目標につながっています。目標というものは、心にいだく主観的なものであり、個人の心の中にだけ存在する『仮想的目標』で、未来にかけた夢なのです。**自分で決めた仮想的目標を追求していくのが人生です**。そして人間は、実際に目標に達することは決してありません。

なぜなら、目標に達したとたん、より高い仮想的目標を設定するからです。こうして人間は、**一生目標追求性を生きていくのです**。アドラーは言います。「すべての精神現象は、ある目標への準備と見なされてのみ、把握し理解されるのである」。(ブルーのバラは、不可能という意味……)

何か、よからぬ不安が頭をよぎる。

S 婦人の昔を知っているだけに……

今夜は早く寝ることにしよう^^;

